

## ドイツ古典哲学—豊かな哲学の発展とその限界

2011. 6. 23

岡山県労働者学習協会 長久啓太

ブログ「勉客商売」 <http://benkaku.typepad.jp/blog/>

≪前回の第6講義のふりかえり≫

- ①封建制社会を打ち倒す資本主義の力となった、自然科学の発展
- ②ベーコン、デカルトなどの唯物論的要素の前進
- ③革命期の哲学は唯物論。フランスでは、ディドロなどが知的共同戦線をつくり、迫害に抗しながら、激しい思想闘争をしていく。その知の力が、革命を準備していった。
- ④現代日本も、知の力で、変革を。知って、考えて、疑って。そして伝える。

### 一。動的な世界観—弁証法の発展



#### 1. ドイツは、当時どんな社会だったか

◇ルネサンスの時代には、先進的な位置を占めていることもあったが、18世紀頃のドイツは、ヨーロッパのなかでは、後進国だった。

\*地中海貿易がおとろえ、大西洋をまわってインドとの交易が開始されるなどして、大西洋側のイギリス、フランス、オランダなどが経済的に発展し、イタリアやドイツは後進国になっていった。

◇18世紀～19世紀前半、ドイツは封建的な農業国だった。

\*イギリスやフランスで、ブルジョアジー（資本家階級）が台頭し、人民の反封建闘争とも重なって革命がたたかわれたのとは対照的に、ドイツではブルジョアジーがまだ未成熟で、封建領主に対して対抗できる力をもたなかった。

◇しかし、イギリスやフランスで革命期に大きな発展をみせた啓蒙思想や哲学、科学技術は、どんどんドイツにも入ってきて、大きな影響をあたえた。

\*経済的・政治的な革命はとうていできない、そこで、「哲学革命」の形をとって、精神の領域で革命的な成果を生み出していったのが、ドイツ古典哲学。そうした状況が、ドイツ古典哲学の観念論的性格を規定もした。

\*カントにはじまり、フィヒテ、シュリングと繋がれ、ヘーゲルにおいて完成をしていくのが、ドイツの古典哲学。

\*この4人は、それぞれ、フランス革命に大きな影響を受けるが、フランスの啓蒙思想家たちとは異なり、彼らは国家に任命された大学教授であり、ときの権力にたいする「公然としたたたかい」という姿勢はもたなかった。しかし、その入り組んだ、難解な哲学的主張のなかに、大きな哲学的発展が見いだされる。

◇動的な世界観の発展

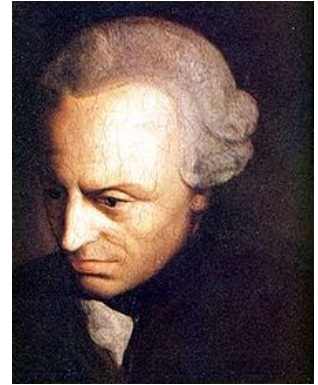
\*それは、「自然も社会も人間も、大きな変化・発展のなかにある」という、弁証法という言葉で表される世界観の豊かな発展だった。

\*イギリスやフランスで発展した唯物論は、個別の諸科学についてはすばらしい成果や認識の発展をもたらしたが、それを全体の連関のなかでとらえ、さらに動的な世界観としてとらえる視点に弱さがあった。ドイツの古典哲学は、その当時の唯物論の弱点をのりこえていく。

## 2. カント (1724 年~1804 年)

### ◇人物像

- \* ケーニヒスベルクというドイツの地方都市に生まれる。
- \* 父は馬具の職人。人を雇うほどの経営者でもなく、独立自営業者。裕福な家庭ではなかったが、勉学はできたので大学に行かせてもらい、そのまま母校の教授になる。
- \* 病弱で体は弱かったらしいが、健康に留意して規則正しい生活を送り、長寿 (80 歳) だった。彼は、朝早く起きて勉強し、昼は大学で講義をし、夜は早く寝る。昼の3時に散歩をし、街の人はそれをみて時計を合わせた、というくらい、規則正しい生活をしたといわれている。
- \* 生まれた町であるケーニヒスベルクにずっといて、この町からほとんど出たことがなかった。外見上はたいへん単調な生涯を送ったが、その内面においては、巨大な世界史の流れにたいへん敏感だった。彼の住んでいた町は、重要な交易・通商の貿易港がありで、カントは、世界を渡り歩いている船長や商人との交流にはたいへん熱心で、そうした世界の動向に強い関心を抱いていた。



### ◇先人たちの影響を強く受け

- \* フランスのデカルト、スピノザの唯物論。イギリスのロックなどの政治思想や発展していた近代経済学。ニュートン力学。フランスの啓蒙思想家らも多くを学んでいく。

### ◇自然科学の研究—カント・ラプラス説 (星雲説)

- \* カントは、大哲学者であると同時に、自然科学者でもあった。
- \* 太陽系の物質は、はじめガス分子ないしは微粒子の状態、太陽系の全空間に分布していたのだが、重い微粒子は軽い微粒子を引きつけ次第に大きくなり、それらのあいだで偶然の衝突が頻繁に起こり、より大きなかたまりになって成長し、太陽や惑星になった、と主張した。『天界の一般自然史と理論』(1775年)。

「化石化した自然観に最初の突破口をひらいたのは、自然研究者ではなくて、一人の哲学者であった。1775年にカントの『天界の一般自然史と理論』が現れた。最初の一撃とはどういうものであったか、という問いは取り除かれた。地球と全太陽系とがなにか時間の経過のなかで生成してきたものとして現れたのである。…(略)カントの発見にそれ以後のすべての進歩の跳躍点があった。…地球がなにか生成したものであったとすれば、地球の現在の地質的・地理的・気候的状态は、地球上の動植物は、同じくなにか生成したものであるはずだったし、空間のなかでの並列的な自然史ばかりでなく、時間のなかでの継起的な自然史をもつはずであった」 (エンゲルス『自然の弁証法』序論)



太陽や地球も、最初はちりやガスだった…。

## 【補論—宇宙の歴史、地球の歴史】

- ◇137億年前（誤差1%）、ビッグバンが起きて、「時間」と「空間」が生まれた。
- ◇誕生直後の宇宙は…
  - \*素粒子だけの世界から、原子核へ（3分後）、そして原子の誕生（38万年後）
  - \*最初の星（ファーストスター）が生まれるのは、2億年～3億年後…
- ◇さまざまな物質の生成と発展
  - \*最初の宇宙には、ほとんど水素とヘリウムしかなかった。では、その他のより重い元素は、どこからきたのか…
  - \*「星（恒星）」内部の核融合反応
  - \*星の一生と元素生成
  - \*鉄より重い元素の生成は、超新星爆発と、それほど重くない恒星の最終段階で。まだ謎の部分もある。
  - \*私たちの「生」は、星の「死」がもとになっている
- ◇太陽系の誕生と地球誕生は同時期—46億年前
  - \*ちりやガスが集まって、太陽という恒星と、8つの惑星。
  - \*ちりとガスのかたまり（微惑星）同士が衝突し、惑星の誕生へ
    - ・水星、金星、地球、火星、木星、土星、天王星、海王星
  - \*ちなみに、太陽の寿命はおよそ100億年ぐらいといわれている。
- ◇地球、46億年のドラマティックな歴史



地球、ありがとう！

### 《補論の補論—地球はどれだけ奇跡的な星か》

- ◇地球には、少なくとも名づけられた生物だけで200万種が存在
- ◇生命の惑星の基本条件は、安定して存在している「液体の水」
- ◇そしてそのための基本条件はこれだけ必要…
  - ①太陽からの距離が絶妙。金星ほど近くなく、火星ほど遠くない。液体の水が安定して存在できる温度として、ちょうどよい距離にある。
  - ②岩盤型の惑星であればこそ。これも、液体の水の存在条件のひとつ。
  - ③地球は惑星としてのサイズが適切。小さければ大気が逃げてしまう。
  - ④太陽の寿命が短すぎない。重い恒星の惑星では、生命が誕生する前に恒星が燃えつきる。太陽より8倍以上重い恒星は、遅くとも数千万年以内には超新星爆発をおこして消し飛んでしまう。
  - ⑤地球は公転軌道が安定している。巨大惑星が三つあると軌道が乱れやすい。
- ◇地球はいかにめぐまれた惑星か
  - ①広い海が、広範囲にわたって熱を移動させる
  - ②1日が24時間（自転周期）であるから、灼熱や極寒が固定されない。
  - ③自転の傾きが23.4度という絶妙さ。このことによって季節が生まれる。
  - ④大きな月のおかげで、自転軸の傾きの変化が小さくすんでいる
  - ⑤過剰な二酸化炭素が取り除かれたため、快適な惑星となった
  - ⑥プレートの運動がなかったら、地球全体が凍りつく
  - ⑦大気に大量の酸素が存在するのは地球だけ
  - ⑧生命が陸上に進出できたのも酸素のおかげ
  - ⑨地球内部で生み出されている磁場は、生命のゆりかごである
- ◇この惑星だからこそ、生命、そして人類は誕生した。

壮大な話から、ふたたびカントに戻ります…。

「このドラマの精神こそ、まさに弁証法そのものです。弁証法とは、事物ならびに思想のドラマについての理論、と行ってさしつかえないでしょう。そしてこのドラマの理論としての弁証法こそ、ドイツ古典哲学をその発端から完成にいたるまで終始貫いていた基本的なモチーフでした」

(高田求『世界観の歴史』学習の友社、1974年)

◇カントの哲学的立場—その認識論においては、唯物論と観念論との妥協

\*主著『純粹理性批判』(1781年)

\*彼は、一方で人間の意識から独立した物の世界の存在をみとめつつも、それを形づくる源泉として、「物自体」という、人間には認識できないが、人間の感覚器官を触発するものがあるとする。

\*この「物自体」を認識できない、ということは、真の姿はけっきょくのところわからないという、不可知論に陥ってしまっている。

\*これは、当時のドイツ社会の中途半端な妥協性・後進性の反映ともいえる。

\*ただ、このカントの主張は、その後活発な議論をおこし、のちのドイツ古典哲学の前進につながっていく。

◇アンチノミー(二律背反)、自由論、倫理学、国家論、美学、有機体論・・・

◇「永遠平和のために」

### 3. フィヒテ(1762年~1814年)

◇カントのあと継ぎとも言われる哲学者。

\*彼はベルリン大学の教授になるが、きわめて実践的な人でもあり、たえず政府と衝突もした。フランス革命に多大な影響をうける。

\*フランスのナポレオン軍に占領されたベルリン大学で、「ドイツ国民に告ぐ」という連続講演を身体をはって行なうなど、ドイツ古典哲学者のなかでは、もっとも行動的。



◇主体(自我)と客体の弁証法—フィヒテの自我哲学

\*主体の働きかけがあって客体が発展し、客体があってこそ主体がそれに働きかけることができる、という考え方。

\*ただ、主体と客体のみ関係性だけしか問題にされておらず、客体と客体との関係性(客観世界・自然の弁証法)がぬけている、不十分さはあった。

\*彼は、弁証法という言葉も、初めて積極的な意味で用いた。

#### 4. シュリング (1775 年～1854 年)

◇15歳でデューピング大学に入学。早熟で天才肌の人。

\*同窓生に、20歳で入学したヘーゲルがいた。寮の部屋も一緒に、フランス革命をともに喜びあった。

\*卒業後、23歳でイエナ大学の員外教授になる。彼は20代～30代にかけてもっとも輝かしい活躍をみせたが、やがて保守的になり、ベルリン大学で教授をしていたときに、学生だった若きエンゲルスに、痛烈に批判をあびた(来週の話)。



◇シュリングの自然哲学の意義

\*シュリングの前提は、フィヒテの自我哲学から出発しつつ、精神と自然、主観と客観を統一することをめざした。自然と精神とは対立するものではなく、相互に関係しあい、つながるのだと考えた。

\*自然が人間を生み出す、自然から自我が生じると考えた。当時、ガリレオやニュートンが切りひらいた力学的諸科学だけでなく、電気や磁気、化学、生物学など、さまざまな自然科学が発展していったことも、背景にはある。

\*シュルダナーノ・ブルーノーの影響を受けて、汎神論という立場をとっていた。汎神論は、神は天上にいるのではなく、自然の現象はすべて神のあらわれとして、草や木や石にも神が宿っている、内在していると考えたもので、キリスト教の中では異端の神学。神と自然、精神と自然を一体のものとして考えた。

\*汎神論の立場に立ちながらも、自然を動的に、歴史的に、つまり弁証法的にとらえようとした。

\*しかし、彼は時代の保守的な流れに流されてしまう弱さがあり、年をとるにつれて、だんだんと保守的になり、晩年は、超越的な神の啓示を説教する神秘主義者、信仰主義者となり、ドイツ反動勢力の都合のよい学者となっていく。

## 二。哲学の巨人の登場—ヘーゲル

### 1. ヘーゲル (1770 年～1831 年)

◇大器晩成型の、思想の巨人

\*父親はヴュルテンベルク政府の公務員。進歩的な教育者であった母の影響もあって、子供時代は学問の環境に恵まれ、文学書・新聞・哲学小論他の書物を読みあさった。8歳のときシェイクスピア全集をもらい読むなど大変な読書家で、感想なども多数書き残している。

\*青年時代のシュリングの同窓生で友人。シュリングよりも5つ年上ながら、むしろシュリングに教を乞う弟子といったかたちで出発する。

\*しかし、2人の性格・資質はまったく対照的で、ヘーゲルは、万事につけ不細工で小回りはきかぬタイプだったが、強靱な精神の持ち主で、頑固にねばり強く歩みをすすめていった。



若きヘーゲル

- \*彼は、フランス啓蒙思想家たちの影響を強く受け、フランス共和国の誕生に感激して、フランス革命を「新しい時代の夜明け」と書いた。
- \*学生時代は、神学部の学生であるにもかかわらず、神学には関心がなく、イエス・キリストの生涯と実践の研究もした。ヘーゲルは、原始キリスト教を「イエスの宗教」とよび、教義・教条が整備された後の「キリスト教」と区別している。
- \*カントの哲学にたいして強い関心をもち、その問題点の解決の課題を考える。

#### ◇大学で教えはじめる

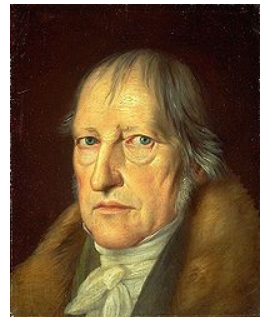
- \*1801年、イエーナ大学で講師をはじめ。たいへんな人気となる。
- \*新聞社の編集者として数年間働く経験も。
- \*1816年、ハイデルブルグ大学教授
- \*1818年、ベルリン大学教授に（この年に、マルクスが生まれる）
- \*1830年、ベルリン大学の総長に。31年、コレラで死去する。

#### ★生前の4つの著書

『精神現象学』『大論理学』『エンチクロペディー』『法哲学（要綱）』

#### ★死後、弟子たちなどによって、『歴史哲学』『美学』『哲学史』

『宗教哲学』などの講義がまとめられ、出版されている。



#### ◇発展をつらぬく糸筋を

「ヘーゲルは、アリストテレスの再来といわれたほど、自然から宗教にいたるすべての学問に通じ、ぼう大な著書と体系を残した哲学者です。とくにヘーゲルが注目されるのは、あの古代ギリシャのイオニアの哲学者、とくにヘラクレイトスなどの、万物は流れる、すべては変化する、など自然の運動のあり方についての考えを復活させ、自然や歴史、精神の世界が不断に運動し、変化し、発展する、という考え方をその哲学のなかにつらぬきました」

（関幸夫『哲学ものがたり』新日本新書、1991年）

「ギリシア人の場合に天才的直感であったものがわれわれのところでは厳密に科学的で経験にもとづいた研究の成果」（エンゲルス『自然の弁証法』序論）

「それ以前のどの体系よりも比較にならないほど、広大な領域を包みこんでおり、そしてこの広大な領域で、今日なお人びとをおどろかすほど豊かな思想をくりひろげる……（略）。精神現象学（これは、精神の胎生学と古生物学とを並立させたといえるもので、いろいろの段階を経過していく個人の意識を、人類の意識が歴史的にへてきた諸段階を縮図的に再現したものととしてとらえている）・論理学・自然哲学・精神哲学、そしてまた、この精神哲学はその個々の歴史的な下位諸形態、すなわち歴史哲学・法哲学・宗教哲学・哲学史・美学、等々として仕上げられている、——これらさまざまな歴史的領域すべてにおいて、ヘーゲルは、発展をつらぬく糸筋を発見し確認しようとしてつとめている。そして彼は、創造的な天才であったばかりでなく、百科全書的に博学な人でもあったから、あらゆる領域で画期的な仕事をした」

（エンゲルス『フォイエルバッハ論』）

\*ものごとを固定的にみず、そこに、発展をつらぬく「糸筋」をみる。これは、現代においても、とても大事だが、たいへんな努力が必要なことである。

\*たとえば、「日本の政治」をどうみるか。

「変わらない」「誰がやっても」「何も期待できない」と固定的に見ることは簡単で、そのほうがラクある。逆に、現代日本の政治のなかに、どんな歴史的背景、問題や矛盾があり、政治闘争の必然性を確認し、どのようにそれが展開いくのかという「糸筋」をつかむ努力は、ものすごく大変なこと。

「ともすれば木を見て森を見失いがちになる……(略)、ここで注意する必要があるのは、それが政治や経済の上で支配的な地位についているものの利益と結びついてくるということです。つまり、木だけを見て森を見させないこと、現状をどこまでも安定した本質的に不変のものであるかのよう

に思わせることは、かれらにとってつごうのいいことなのです」

(労働者教育協会編『新・働くものの学習基礎講座1 哲学』

学習の友社、1998年)

◇弁証法の考え方を「わかる」ことと、「つらぬく」ことは別のことである。

「ヘーゲル哲学の巨大な意義は、こうした歴史的な見かたをすべての事物につらぬこうとしたことにあります。自然、社会、人間精神の諸現象のすべてのドラマをとらえようとしたのです。そしてこれらのドラマの普遍的な法則性を、弁証法という言葉でいいあらわしたのでした」

(高田求『世界観の歴史』学習の友社)

「世界はできあがっている諸事物の複合体としてではなく、諸過程の複合体としてとらえられねばならず、そこでは、みかけのうえで固定的な諸事物も、われわれの頭脳にある諸事物の思想上の映像、つまり概念におとらず、生成と消滅のたえまない変化のうちであり、この変化のうちで、みかけのうえでは偶然的なすべてのものごとにあっても、またあらゆる一時的な後退が生じて、結局は、一つの前進的発展がつらぬかれているという、偉大な根本思想——(略)しかし、この根本思想を言葉のうえで承認することと、これを実際に研究のそれぞれの領域にわたって個々に遂行することとは、別のことである」

(エンゲルス『フォイエルバッハ論』)

\*「研究」だけじゃない。人への態度、活動への態度も同じ。

個人も集団も、組織も運動も、「たえまない変化のうち」にあること。その変化のなかに、「あらゆる一時的な後退が生じて」「一つの前進的発展がつらぬかれている」ということを、事実のなかからつかみだす努力。



## 2. しかし、ヘーゲルの自己矛盾

◇弁証法の世界観を打ち出しながらも、その正反対の要素を抱え込んでいた

\*こうした現実の豊かなドラマを起こしている究極の力があるとし、それを「絶対理念（精神）」と名づけた。

「ヘーゲルにとっては、彼が理念という名のもとに一つの自立的な主体に転化さえした思考過程が、現実的なものの創造者であって、現実的なものはただその外的現象をなすにすぎない」（マルクス『資本論』第2版へのあとがき）

\*自分は、その歴史のドラマの観客席にいて、見物するだけという役目  
→ドイツ古典哲学を特徴づける階級的な性格の反映

\*ヘーゲルの哲学こそが、哲学史の総結論であり、完成者だとした。致命的な自己矛盾。



## 3. ヘーゲル死後

◇巨大な影響を与え続けた

「このヘーゲル体系が、ドイツの哲学的に色づけられた雰囲気の中だけでは、どんなに巨大な影響をおよぼしたかは、よくわかることである。それは一つの凱旋行列であった。この行列は、二、三〇年も続き、ヘーゲルが死んでからもすこしも静まらなかった」（エンゲルス『フォイエルバッハ論』）

◇2つの側面、どちらに共感するかによって、後輩たちの道がわかれた

\*自己完結的な性格をもった、観念論的性格・・・ヘーゲル右派のグループを形成  
→政治的・宗教的に保守派に属する人が共感を寄せた

\*弁証法的世界観に深い共感を寄せた人びと・・・ヘーゲル左派（青年ヘーゲル派）  
→ヘーゲルの保守的・観念論的側面をのりこえて、進んでいこうとする立場

→このグループのなかに、若きマルクスとエンゲルスが、いたのであります。

まる



えん



次回（6／30）は、「変革の哲学を求めてーマルクス・エンゲルスの青年時代」